

Title	清少納言の精神機構（承前）：翁丸の鑑賞を中心として
Author(s)	林, 和比古
Citation	語文. 1952, 6, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68403
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

清少納言の精神機構

(承前)

——翁丸の鑑賞を中心として——

林 和 比 古

内 容

五、「大進生昌」の段について

六、ことゝなるもの

七、段相互の関係

八、段の分類とその順序

九、分類型と雑纂型

附記 「人、人にもいはれてなきなどす」の傍証

五、「大進生昌」の段について

「翁丸」の前段「大進生昌」の段についても筆者は諸家とやゝ異った解釈を下すのである。この段では中宮・清少・生昌の三人の主要人物が登場する。そして読者は次のことを知らされる。

- (1) 清少納言は字才を誇り勝気である。
- (2) 中宮は逆境の中にありながらも春の様な温い思ひやりをもつてみられる。
- (3) 生昌は頓馬なところがあって、その間の抜けた言語動作が人

の悪い女房達の嘲弄の的になつてゐる。

枕草子の解釈家は(1)(2)(3)がよく表はされてゐるとか、(1)と(2)が殊によく描かれてゐるとかいふ。そして感想に転じて、清少の驕慢勝気を悪評したり、宮廷の風儀の紊れを指弾したりするのが常である。

(註一、二、三、参照) しかしこれは単に記録された物の読み方であつて、表現されたものゝ読み方ではない。前記(1)(2)(3)が分つたといふだけでは素材を了解したといふに過ぎない。(1)によつて清少を理解したことは、素材として記録された清少を理解したといふにすぎない。われわれは素材としての清少の上に、作者としての、即ち表現主体としての清少納言が存在することを知らねばならぬ。

(1)(2)(3)の様な素材的知識を駆使することによつて、作者清少が如何なることを表現しようとしてゐるかを知らなければならぬ。枕草子は単なる記録ではない。作者清少が何かを表現しようと思つてゐる作品であると私は考へる。そして大進生昌の段も、無意識にその日の出来事を記録しておいた単なる日記だと私は見ないのである。

もし作者の意図する所が「(1)清少納言は字才を誇り勝気である」

ことを示すことにありと解するならば、何の必要があって自己のその様な性格を枕草子に記録しておかうとするのか了解に苦しまねばならぬ。

つぎにまた、作者の意図は「(2)中宮は逆境の中にありながらも春の様な温い思ひやりをもたれてゐる」ことを示さうとしたこととれないこともない。枕草子全巻、中宮に關したところ、すべて作者は讚仰の氣持をにじみ出してゐる。これは作者が全心から定子中宮を懐しんでゐるために、自然に出てくる感情である。しかしそれはこの段に限つたことではない。

この段で作者が特に意図したことは「生昌の頓馬な拳措言語」を素材としながら、何か別の事を表現しようと思つたことと解したいのである。即ち作者清少は自己の缺点(驕慢勝氣は平安朝時代でも缺點として人から擯斥されたであらうことは紫式部日記や榮華物語中の清少納言評によつて分る)や皇后の思ひやりを素材として用ひながら、「生昌の愚鈍」の事實を強化し、それよつて他のことを表現しようとしたのである。これは近代文学に於て、作者が、主人公としての自己の短所の告白を、素材として用ひながら、ある主題の表現を強化するのと同じである。

作品の主題といふものは、必ずしも作者の意図と一致するものではない。主題は作者を想定しないでも、読者が作品からおちかに受けるものである。さういふ意味からすれば、本段から読者のうけとる主題は「皇后の思ひやりを示すこと」とした方がよからう。なぜならその主題は作者清少の性格とか枕草子の方法とかを予想しないで、素直な一通りの読解から受け入れられる主題であるから。「他のこと」の方は「皇后の思ひやり」に圧倒されてしまつて、清少の性

格とか本書の方法とかの特殊性を考に入れた上でなければ捉へにくい意味であり、作者の意図といふものを想定しつゝ考へなければ表れてこない意味である。完全に成功した作品に於ては作者の意図は作品の主題と合致するのであるが、諸家に議論が分れる所を見ると、本段は充分成功しない作品であるか、または非常に隠微なむつかしい作品であるのであらう。とにかく私は第一次の作者の意図を「生昌の愚鈍な言語や行為の描写」ととらへる。專見のやうに作者の意図をとられたのは内海氏の詳解であつた。(註四参照) 註一、二、三、四によつて同一の「大進生昌」の段に対しても諸家の鑑賞が如何に相異してゐるか、その一斑が次の註によつて分るであらう。

〔註一〕 金子元臣氏説……その厭はしい程にまで、生昌を譏弄したのも、たゞ自己のわづかな驕慢と、氣転に富んでゐるといふ小さな誇を満足させようが為ばかりで、からかふが面白さに、からかつてゐたのである。そこで中宮様が生昌へ下された御同情の御詞を伺ふごとに、なる程と感じ、生昌に対しては、「一夜の事やはむ」と恐れたのである。清少はつまり正直者である。彼はすべて赤裸々に、善悪にかゝはらず、その胸臆を披瀝してゐる。……(中略)……この節を読むと、殊に中宮のあでやかに情深く入らせられた事を想はずには居られない。清少が感心したのも尤もである。前にもいつた通りこの頃は非常の御否運に出會つて、困厄を重ねられながら、なほ平生の温容をたもたれ、何時も春風が帳帷を繞つて吹いてゐる褥がある。(評釈五〇頁)

〔註二〕 窪田空穂氏説……この物語は物語そのものとしては、生昌の迂達を嘲り得たといふだけのもので、むしろ厭はしい性質のものであるが、清少納言によつて語られた為に、不用意な間に別様

の光を持ったものとなって来てゐる。それは中心の生昌は却つて生きてゐる所が少くて、清少納言自身、中宮などが、如何にも生き／＼と現れてゐることである。

この一段で最もあざやかに目に着くところは、清少納言の男子に対して持つてゐる弱みで、男子からよく思はれたいと無意識ながら強く思つてゐる事のあらはれてゐる点である。彼女が生昌に食つて懸つてゐるのは、自身の稍取り乱した恰好を多くの男子に見られてしまった、そしてそれは彼の不注意の為だとしてゐる所にある。清少納言の怒の餘りにはげしいのに対して、中宮は婉曲にからかつてをられるが、第三者として観ると、何もそんなに怒るにもあたらない事であつたに相違ない。それ程までに清少納言は男子に対しては外見をつくりたかつたのである。……(中略)……清少納言が、たゞ自分の心持ばかりを追つて、殆ど周囲の者の心持を理解する事も出来なんだのと並んで、中宮は如何にもよくその場合場合を理解してゐた。生昌の清少納言の許へ忍んで行つたのは、その才学を愛でた為であらうと解釈したのも中宮である。又態と清少納言を呼び出したのも、彼女を喜ばせる為である。と解釈したのも中宮である。生昌の迂遠は迂遠として、その美所を認めてゐたのも中宮である。その場合場合の短い言葉の中に、敏く上品な中宮の面目がよく窺はれる。

全体として見ると、清少納言が生昌の迂遠なのを語らうとした物語であるが、現された結果から見ると、生昌はそれ程にはあらはれずに、清少納言自身、中宮などの方が遙かによく現れてゐる。この、意識した方面よりも、無意識だつた方面の方がよく現れてゐる所が清少納言の文章家であつた所以かと思ふ。(枕草子

評釈四一頁以下)

〔註三〕 松平静氏説……この一段、世の人は只好色、淫行の如く思ひなして、いたく清少の人品をもそしめるめれども、さまで、こちたくいふほどにもあらじかし。当時宮掖の裏面はなほ甚しき事どもいと多かりしを思へば、又何ぞ怪むに足らん。この段ことに軽妙の筆を弄して、清少が学才を見はし、人にまげじの志のある所、さては眼中人なきが如く、昂然として堂々たる男子をして後に瞠若せしめたる有様など、只紙面に躍如たりといふべし。わきてその会話をうつせる処の如き、実に奇警瀟洒を極めて読む者只其場に臨みて聞くが如き感あらしむ。(枕草紙詳解二三四頁以下)

〔註四〕 内海弘藏氏評……才のない、まの抜けた生昌を相手にして、思ふまゝに譏弄する態度は、作者の非難される点なのであるが、その才気の濺測たるさまは、この一段でも、よく窺ふことができるのである。まことに眼中に人なく、堂々たる男子を後に瞠著たらしめるといふ意気である。して又、そのはんまな生昌を向にまはして、こちらから、これを見、これをからかひ、これを笑ふ、その作者の態度が、にくらしいほどきえて出てゐるのである。……生昌のその世なれないさまが、をかしく写し出されてゐる。そして、それを、中宮が、さう笑ふな『きすくなるものを』とお制しになるといふので、その正直で、それで、世なれず、はんまである生昌の態度が、一層強くあらはれてゐるのだ。『さてこそ、上おほひ著たるわらべも参りよからめ』といふ警句が、一番よく書いて見えてゐる。……いかに生昌らしい人が、そこにあらはれてゐる。それが、この段の巧である。そして前段と同じやうに、「おのが心に賢しと思ふ人の誉めたるを、

うれしと思ふとて、告げ知らずならむ」といふ中宮のことばによつて、一層きはやかに生昌の人物が、そこにあらはれてゐる。(枕草紙評釈一五頁—一七頁)

X X X

四脚門のヒントからやつと于定国の故事に思ひついて子供のやうに嬉しがるお人よし、「あこめのうはおそひ」とか「中勢」とかの昔風の言葉遣ひをする時代遅れ、(現今シャッポとか活動写真とかの語を使ふのと同じで時代遅れなことを示す)、女性の寢所へ忍び込まうとして室外から案内を乞ふ頓馬加減、いづれもたゞみかけて生昌の愚鈍さを描写しようとしてゐる作者の意図がよく見えてゐる。一体枕草子にはあはれること、めでたきこと、をかしきこと(風流なをかしさ)などが書かれてゐるので、意図的に他人の短所をあげつらう様なことはないのである。もし短所をあげる様なことがあればそれは何か外の面白さを表現するための方便に使はれてゐるのである。かう考へると、「生昌の頓馬」を念入りに描写した意図は実に他にありと云はねばならぬ。

しからばその目的は何処にあるかと云へば、「第四段こと／＼なるもの 法師の詞、男女の詞云々」から糸を引いてゐるのである。

第四段に、法師の詞とあるところから、その言葉遣のみならず、俗世間とは全く異つた風習や道徳を連想して描いたのが「第五段思はん子を法師になしたらんこそ」である。

さらに旧弊な下級官吏、融通の利かぬ漢字上りの堅人といふ様な人間の言葉遣や振舞は宮廷貴紳のそれとは全く異つた感じを与へるところから「生昌事件」を連想したのである。即ち「生昌事件」は「こと／＼なるもの」の一例として引かれたと見られる。

六、こと／＼なるもの

こゝで「こと／＼なるもの云々」の字句を吟味せねばならぬ。伝能因本(吉沢氏校註枕草子底本古活字本による)

こと／＼なる物 法師の言葉、をのこ女の言葉、げすの言葉とかならず文字あましたる

三卷本(朝日古典全書枕冊子による)

おなじことなれどもききみことなるもの 法師のことば、おとこのことば。女のことば、げすのことばにはかならずもじあまりたり。足らぬこそをかしけれ

前田本(前田家本枕冊子新註による)

こと／＼なる物 法師のことば、おとこ女のことば、げすのことばにはかならずもじあまりたり

堺本(新校群書類従一二八頁による)

おなじことなれど(も)、きく耳ことなる物。ほうしのこと葉イナシ「を」とこのこと葉、よき人のこと葉」、げすのことばは、みなもじあまりたらぬこそあやしけれ

堺本(鈴鹿義鯨氏本による)

おなじことなれときくみことなるもの ほうしのことばはけすのことはみなもしあまりたらぬこそおかしけれ

「こと／＼」は異事、異言、事々、言々など種々の語源説があるが、意味としては「異つてゐること」である。つまり音声や言語や其他の表現形式が社会や団体や階級によつて相異のあることである。法師の社会には法師独得の表現形式である言語風習があり、男の世界には男独得の、女の世界には女独得の表現形式があり、下層

社会にも独自の表現形式がある。下層の言葉遣は貴族の人がきくと何か冗漫な所があって、下品にきこえるといふのである。

しかしこれだけではこゝの意味が本當に分つてゐない。つまりあとの半面が忘れられてゐる。その半面とは「かやうに表現形式はちがひながら、表現内容（意味・精神・心情）はどの社会でも同じである。誠意とか欲望とか悲喜哀歎といふものはどこまでも同じである」といふのが作者の本意である。このことは伝能因本や前田本の「こと／＼なるもの」だけでは分らないが、三巻本や堺本の「おなじことなれどきゝ耳ことなる物」の「おなじことなれど」によつて分るのである。言語や風俗は村境を越えるともう違つてゐるが、人間の心は日本中どこへ行つても、否世界中よく似てゐるといふ意味である。この点を指摘した説は管見に入らないが、私はかう解さなければ本段の意味は分らないのでないかと思ふ。

しかし、「こと／＼なるもの」が原稿の形で、それだけでは意味を十分に説明し尽してゐないので、「おなじことなれど云々」と加筆したのか、「おなじことなれど云々」が原稿で、これを冗慢と感じて「こと／＼なるもの」と斧正したか、その関係はこゝだけでは何とも云へない。しかし両方の本文とも清少自身の推敲であつて、決して他人のさかしらではないと思はれる。なぜならば、こゝの本意を完全に把握してゐる人は清少を措いて他にないと思はれる。他人であるかぎり「こと／＼なるもの」おなじことなれど、きゝ耳ことなるもの」の眞の関係は分らず、まして、一方から他方へ改作し得ないと思はれるのである。

七、段相互の関係

○四段と五段との関係

「こと／＼なる物 法師の言葉」の連想から五段「思はむ子を法師になしたらむこそは」の文章が書かれたことは諸家の認めることである。法師の仕来りや言語は俗人のそれと非常に異つてゐることは周知の通りで、法師の行住坐臥の様子や靈山験地での難行の有様がこの段で語られてゐる。しかし大切なことはそれだけでなく、その反面、心情に至つては僧も俗も同じことが語られてゐることを見のがしてはならない。法師でもやはり「居眠りをしたくなつたり」、「女などの居る所をものぞきたくもなつてくる」のである。法師も外面は異なるが、心は同じだといふ点を述べたのがこの段の反面の趣旨である。

さすれば五段は、四段「こと／＼なるもの 法師の言葉」に対する気紛れの連想でなく、前々号で述べた清少の常套手段たる、題詞（こと／＼なるもの）、項目（法師の言葉）、具体的説明（思はむ子を法師になしたらんこそは云々）の關係に立つものと思はれる。

○四段と六段との關係

四段と六段との關係も前項と同様に考へられる。儒者出身の下級官吏の世界にはその言語作法に獨特のものがあるにもかゝらず、その人間の底を流れる心情は同じことであるといふ点で、やはり四段の具体例となるのである。

清少の言ひかけた故事を知つてゐた時の生昌の子供らしい喜び、をど／＼と清少の寝所に忍びよるへまな拳動、家兄惟仲をひたすら畏敬して、彼が清少をほめたとなるとあたふたと駆け来て時も所も考へずに清少を喜ばさうとする子供っぽさ、皇后や作者清少は彼の心根をすっかり見通してゐて、「彼も人の子、やっぱり皆と同じ

心を持つてゐるのだね」と感歎してゐるのである。この感歎こそ作者清少の最も奥底の本心であつて、決して生昌の愚鈍を記録したり罵倒したりすることに本心があるのではない。

○四段と七段との關係

四段と七段の間にも前項及び前々項と同様の關係のある事を私は述べようとするのである。内裡に飼はれてゐる翁丸は畜生であるから、もちろん言葉を発しない。打擲せられた犬は女房達に対して尻尾もふらねば近寄つても来ない。しかるに清少の同情の一語をきいて突然ふるひわななき涙をたゞおとしにおとす。人間は言葉を発するが、犬は言葉を発しない。表現形式は相異どころか有と無で、すっかりちがふ。しかし心情は同じなのだ。犬でも他の同情には感ずる心があつて泣き出してしまふのだ。聞き耳、即ち表現の形式はちがふが心は全く同じことであるわけだ。

盤齋抄及び旁注七段の末に「是まで犬猫などの上に聞み、ことなるもの也」とあり、これによつて前に私は、盤齋・惟中の考へ方を異談珍説と解する部類に撰した(語文第四輯二頁)のであつたが、それは私の誤解で、彼等の考も本稿の考と同じで、「題詞こと／＼なるものについて具体例として犬猫の物語をあげたのである。即ち五・六・七段までは四段こと／＼なるものについて例として述べられたのである」と解すべきであつた。こゝで訂正しておく。

たゞ後世の諸学者が盤齋・惟中の詞を正解できなかつたのは、無理もない所がある。「こと／＼なるもの」の具体例とするためには犬が人間とあまり相違しすぎてゐて一寸常識では具体例とは気がつかないのである。

しかし「心情は犬も人間も共通だ」といふ見地から考へると七段

もやはり四段の例としての機能を發揮してゐることに気がつくであらう。即ち「同じことなれど、きき耳ことなるもの」といふ題詞の「同じこと」の語が大切になる所以である。そして七段末尾の「人などこそ人に言はれてなきなどはすれ」(人間こそ他人から同情の詞をかけられて泣きはすれ、犬が泣かうとは思はなかつた。犬も人間も結局心は同じものなんだね)の作者清少の感想が実に利いてく

るわけである。

語文第四輯で七段をD類に撰したのを再掲すると

あさましきもの(をかしきもの)……………題詞

ひとの情に感ずる犬(あはれなるもの)……………項目

上にさぶらふ御猫は云々……………説明詞

をかしくあはれなり……………心情詞

右を鑑賞甲式とする。これは七段単独で清少の心理を想像したものであつた。

しかし四段との対応に於ては、同じ機構ではあるが次の様に変つてくる。

こと／＼なるもの(同じことなれどきき耳)……………題詞

翁丸……………項目

上にさぶらふ御猫は云々……………説明詞

をかしくあはれなりしか……………心情詞

(人、人に言はれてなきなどす)……………

これを鑑賞乙式とする。乙式は甲式の上に二重写しとなつて成立する複雑な鑑賞である。甲乙二重の複式鑑賞方法ともいふべきものが本當の鑑賞であると思はれる。

○四・五・六・七段の構成

清少の精神機構と表現形式の特徴を前に「すさまじきもの」の段を例にして題詞・素材詞（これを以下項目といふ用語に改める）・説明詞・心情詞として説明した。（語文第四輯一三頁参照）ところが、四・五・六・七段全体が一組となつてやはりこの根本的特徴を有するのである。「」の部は筆者の補足。

（四段）こと〜なるもの（同じことなれど）……題詞
（き）耳ことなるもの

法師の言葉……項目

（五段）思はん子を法師に云々……説明

男のことば……項目

女のことば……項目

下衆のことば……項目

必ず文字あまりたり……説明

「生昌の言葉」……項目

（六段）大進生昌の家に云々……説明

「翁丸の表現と心」……項目

（七段）上にさぶらぶ御猫は云々……説明

右の關係を見ると五・六・七段と四段とは別の段でなく、題詞「こと〜なるもの」に対する項目と説明が連想によつて次々と発展してくる一連の關係になつてゐることが分るであらう。

八、段の分類とその順序

枕草子の本文に段次を附けることは明治以後の活版書の常套手段であるが、明治以後でも松平静氏の枕草紙詳解・内海弘藏氏の枕草紙詳釈などには施されてゐない。段次を附けることはいまはつきり調べてゐないが、武藤氏の通釈あたりからではあるまいか。江戸の

三抄を初め古写本類すべて段分けのないことから、これは清少納言の与り知らぬことであるといへる。しかし枕草子の文章をどこで一纏りにするかといふことはその解釈鑑賞に重大な關係の生じることである。

また本文の順序も伝能因本の様であつたか、三卷本のやうであつたか、それとも前田本又は堺本の様であつたか疑問である。こんな形式上のことは、單なる知的銓索なら之を文献学者にお願ひしておかずであるが、枕草子に於ては、これが本文の解釈鑑賞に至大の關係があるから問題にしなければならぬ。本論に於て利用した春曙抄の段次の如きも池田博士が岩波文庫版に施されたものであつて、北村季吟の与り知らぬ所である。季吟は原版春曙抄に於て、段を三す文字を使はず、題詞の場合は改行一字下げにし、題詞の明かでない場合は後世別段とせられるものでも改行せずに書き續けてゐる。この場合、別事項なる事を示す「印を打つこともあるが、また打たないこともあり後世の段次に合致しないことがある。一例をあげると、岩波文庫版春曙抄で、

二六九

うちとくまじきもの 悪しと人にいはるゝ人。さるはよしと知られたるよりは、うらなくぞ見ゆる。

二七〇

舟の路。日のうちらゝかななるに云々
 かやうに分けられてゐるが、延宝二年原版の春曙抄では、

うちとくまじきもの

あしと人にいはるゝ人。さるはよしとし

られたるよりはうらなくぞ見ゆる。

舟のみち。日のうららかなるに海のおもてのいみじうのとかに、云々

となつてゐる。

私は例の清少の精神機構と表現形式から考へて、「うちとくまじきもの」を題詞、「あしと人いにはるゝ人」及び「舟の路」を項目、其余をそれ／＼の項目に対する具体的説明と考へて、(日のうららかなるに云々の説明文は「翁丸」にも匹敵すべき長文であるが、やはり説明文であることに変わりがない)岩波文庫版の様に二段に分けることを誤と考へるのである。とにかく枕草子の解釈鑑賞においては現行活版書の段次の分け方はよほど警戒する必要がある。そして真に知らねばならぬのは作者自身の胸裡である。したがって、「こと／＼なるもの」以下を四・五・六・七段に分割するのは後世のことであつて清少自身はそのやうなつもりであつたか否かは疑問である。「すさまじきもの」が幾つかの項目及びそれに長短の説明文を伴つて一段とされてゐるが、それと同様に取扱ふべきものでないかと私には思はれるのである。たゞ、五・六・七段においては、「項目」を明示しないため分りにくくなつたのである。

九、分類型と雜纂型

枕草子の内容を次のやうに五類又は三類に分類されたのは池田博士である。之は前述のやうに筆者のA B C Dの四分類にも似たもので根本的には趣旨の一致するものである。

枕草子内容分類表

筆者の分類		A	B	C	D
日本文学大辞典(池田博士)の分類		第一類 天然自然現象・客觀的事物に関するもの (……………は)	第二類 精神内容に関するもの (……………もの)	第三類 四季の情趣に関するもの	第四類 自然又は人生の面白味 についてのべたもの
岩波講座「枕草子」内容と成立(池田博士)の分類		一、類纂的形態	二、隨筆的形態	三、打聞・説話・自讃を一括する形態	第五類 見聞・体験・日記の類

右はわれわれの主観的の分類に過ぎないが、この分類形態がそのまま枕草子の原形に關係すると池田博士が云はれるに至つて問題となる。

前田侯爵家本はこの分類(註、五分類を指す)のまゝに冊を立てゝあつてこれが最も原本の面影を忠実に伝えたものではないかと思はれる。(日本文学大辞典)

池田博士の所論を岩波講座「清少納言の作品」(符号イ)、著書「枕草子に関する論考」中の「枕草子の原形とその成立年代」(符号ロ)、同書「枕草子の形態に関する一考察」(符号ハ)、から本論に關係あるものゝみ纏めると大体次の様になる。

(1) 枕草子の原形は形式としては類纂的(註、前述三分類の一、

類纂的形態の部分のみ)で、内容としては歌枕の解説に類するものであったらしい。(口三九頁以下)

この原本の用紙は内大臣藤原伊周が定子に奉ったもの、執筆者は清少納言、執筆場所はその里宅、執筆年時は長徳二年六月半以後七月十日頃までの一ヶ月足らずの間。(口三九頁以下)

(2) 三分類中の隨筆的形態の部分と打開・説話・自讃形態の部分とは前記原本とは後れて別に成立し、おそらくとも長保三年八月までの間に原本本に附加されて前田家本に見る様な分類的な枕草子が出来上り、巻末に作者による跋文が附せられた。

○跋文の附せられたのは長徳四年十月(経房は十月二十二日軼左近中将)以後、遅くとも長保三年八月(八月二十五日補蔵人頭)までの間であらうと考へられる。それは頭中将とは呼ばないで左中将と称してゐる点から推定されるのである。尤も二八六段とか二八七段とかのやうな打開的部分には或ひは更に後年に於て作者又は他の人によつて追記されたものがあるかもしれない。(口三九頁以下)

○枕草子の流布本の形(註、雜纂型のこと)に作者の気分の一を見ることは絶対に出来ない。このままの形では、作者が執筆の際に経験した心持を単に想像することさへ困難である。この三つの部分はそれぞれ執筆の動方たる感興の性質を異にしてゐる。それ故三つの形態が別々に成立したと考へるのが自然ではないかと考へる。(イ)

(3) 前記(2)において集成された分類体枕草子がその後何かの事故で散乱し、さうして雜纂型の枕草子が成立した。(イ、口、ハ) この場合二種の成立のし方を池田博士は考へられるやうであ

る。

(i) 散乱したものがそのまま無秩序に綴ぢ合はされた。(イ)
(ii) 散乱したものが後人の主観的聯想によつて綴ぢ合はされた。(口)

○多分(i)が初期の同博士の考へ方で、(ii)が修正説であらう。それは次の記事によつてさう考へられる。

○たしかに枕草子(註、雜纂型)の諸段の間には聯想が動いてもあろう。しかしその聯想は果して作者に関するものか、それとも再編輯者に関するものか、その点は何によつて判定されるのであらう。再編輯者の編輯規準が、その「聯想」にあつたことは疑ひを容れぬところであるが、それは必ずしも作者に関するのではない。要は編輯者に於ける聯想がどれだけ作者に於ける「聯想」であり得たかといふことである。(ハ七七頁)

○右の各部の成立が同時であるとなす論者は、その各々の部分の興味と関心が浮雲の如く雑多に去來する所に文学作品としての特別の面白味を見出さうとする。しかし私(註、池田博士)は右の部分が同時に入り乱れて雑然と執筆されたとは考へられない。(イ)

(4) 分類的な枕草子も雜纂的な枕草子も更に部分的に後人の改組にあひ、著者自筆の稿本そのものの面目を伝へるものはない。

× × ×

(イ、口)

筆者の想定するところは根本的な点に於て右の池田博士の説と対

立する。いま長徳二年頃伊勢守源経房によって持出された枕草子を甲本とし、長徳四年—長保三年の間に清少が「左中将云々」との跋を附した枕草子を乙本とする。

一、清少が定子皇后から料紙をいたゞき、「枕にこそは」といさいで作成した本が甲本であり、これは最初から雑纂式のものであっただらう。(今日の伝能因本、三巻本のやうな)

○この甲本が池田博士では前述(1)類纂本に当るわけであるが、筆者の考へでは雑纂式、即ち「山は『うつくしきもの』等の類纂部の中に随想部、日記部の入交つたものとする。尤も甲本以前にメモの資料集又は参考書とも云ふべきものがあつたであらうが(それは類纂的歌枕辞典式のものであつた。しかしそれは清少自身の手になるものとは限らない。そしてそれはこゝで問題にする枕草子とは區別して考へねばならぬ)一、乙本も同じく雑纂式で、甲本と根本的な組織は変らない。たゞ清少によって内容が増補され文章が推敲された。殊に長徳三年頃から長保二年までの事件を素材とする記事が多く附加された。

○甲本と乙本の間で幾部かの枕草子が(改稿一本改稿二本など)考へられる。

一、従つて池田博士の前述(3)の如き後人の手又は偶然の機会の成立による雑纂本を想定する必要はない。たゞ乙本成立後も清少が改稿増補したであらうと考へられる。

一、別人の手の加はつた部分は書写時に於ける魯魚焉鳥の謬、不明語句又は誤解辭句に対する独断的改竄、いくらかの段の位置変更、及び分類的枕草子の編纂である。

○堺本前田家本などの分類的枕草子は清少の手になつたものでなく、別人(必ずしも後人でなくとも、同時代人でもよい)の手になつたものである。その分類に於て資料に使はれた雑纂本は一種でなく当時存在した前記各種の枕草子稿本を涉獵したと思はれる。

以上が筆者の仮定である。枕草子の如き決定的な証本の存在しないものは、幾多の仮定説の生ずるのはやむを得ない。要は一々の疑問や事象がどの仮定説によって矛盾なく解決されるかである。その解決が完全に果された時仮定説は真実となるであらう。しかし之は尙幾多の考究を要することであらう。

本論では主として四・五・六・七段の事象を右の仮定説によって説明してみよう。

(1) 四段「こと／＼なるもの」に対して五・六・七段の連続する形式は前述のやうに清少の根本的な精神機構と表現形式に合致してゐる。四段から五段へ続けるのは別人の聯想でも出来ない事はないかもしれぬが、その後へ六段七段と続けることは作者自身にして初めて云へることであつて、別人では到底出来る聯想ではない。

まして事故などによつて分類的枕草子の紙片が散乱し偶然隣りあつたとするのではあまりに四・五・六・七段の順序が巧妙すぎるではないか。而もこの所一箇所にとゞまらず全巻かやうな神妙な偶然が支配したといふことは信じられないのである。

(2) 六段は長保元年八月、七段は長保二年三月とその事件日が決つてゐるのであるから、たとへ四・五段は甲本の時から存在したとしても、六・七段は後に増補されていったことが明らかで

ある。清少自身「ことくなるもの」を推敲してゐる中、ふと
うかんできた事件であると考へられる。

(3) もし初めから甲本乙本とも類纂式であつたら、これが事故の
ため散乱したとしても、いくら別人でも初めの分類様式は大体
覚えてゐる筈であるから、いくらか類似の分類式のものに(た
とへ同類内で段の前後はあるにしても)復原しようとしたであ
らう。散乱のまゝ綴ぢ合はせてしまふなどは全く兎戯に類する
ことである。

また後人が分類式のことを意識的に雑纂式に改編したと想定
するのは、整然と分類せられてゐるものを、一体何の必要があ
つて雑纂式に改纂する必要があるであらうか。

雑纂式のものから分類式のものを作るのは後人の行為として
は自然であるが、分類式のものから雑纂式のことを改編するこ
とは想像もつかぬ不自然である。

(4) 資料集とかメモ的な歌枕集は枕草子に着手する前から存した
であらう。

山(は)・をぐら山・みかき山・このくれ山・いりたちの山
・忘れずの山・すゑの松山・かたさり山(こそいかならむと
をかしけれ)・いつはた山・かへる山・のちせの山・あき
くら山(よそに見るぞをかしき)・おほひれ山(もをかし、
臨時の祭の舞人などの思ひ出でらるるなるなり)・みわの山
(をかし)・たむけ山・まぢかね山・たまさか山・耳なし山
かやうに山の名詞の一ふし面白いのを集めることは急には出
来ないことであるから既存のものを利用したと思はれる。しか
しこの資料集と枕草子原形本とを混同することは許されない。

中宮より料紙拝受後、前記引用文の括弧内の如き短評を加へた
り、更にその發展した、数葉にも互る身上話などを加へて枕
草子が初めて出来たと解すべきではあるまいか。

右の事實は清少納言から跋文中に一あいなり、人のために便
なきいひ過ぐしもしつべきところもあれば、ようかくし
置きたりと思ひしを、心よりほかにこそ漏り出でにけれ一と言
つてゐるのであるから誤りではない。右の清少自身の弁解は乙
本のためのものでなくて、甲本流布に対する弁解であるから、
「人のために便なきいひ過ぐし」も既に甲本当時からあつたと
見るわけである。歌枕のみを集めたのに対して「人のために便
なきいひ過ぐし」と懸念するには及ばないからである。

(5) 前記跋文は本論に大切な關係を持つからも少し説明を加へる
こととする。

乙本には跋がついてゐた。それは現存三巻本のものか、伝能
因本第一類のものか、第二類のものか或はもつと別のものでは
あつたかは明かでないが、とにかく現存三系統の跋文は繁簡の差
はあるが趣旨に於ては同一のことを意味してゐると思はれる。
(跋文の解釈については「枕草子跋文考」に於て別の機会に述
べる)この跋文によつて作者の意圖した枕草子の性質がうかゞ
へるわけである。

○ 甲本は乙本とその性質形態を異にしてゐないと思はれる。

(増補改訂の關係はあつたとしても)

その理由は、跋文末の「伊勢守源経房が清少の里宅へおい
でになつた時枕草子がお目にとまり、之を持帰られた。それ
が枕草子の世間に流布する最初であつた」といふ意味の文章

は、跋文初頭の「枕草子は人のため不都合な失言もあるから、注意して隠しておいたが意外なことで世間に流布してしまつた」といふ詞に対する詳細説明をしてゐるのである。

つまり乙本の跋文を書きつゝある時、清少は「先に世に流布した甲本もこの乙本と同性質のもので、他人に対して失言をした点もあるから、隠しておいたのに云々」と云つてゐる。

もしも甲本が池田博士の言はれるやうに歌枕の分類集であるなら「和歌や木や草や鳥や虫について、世人のよろこびさうなもののみを吟味して集めたその書物に対して、「あひなう人のためにひんなきいひすくしもしつへき所々もあれば」と断る必要があらうか。かく断つてゐるのは甲本中にするで和歌や木草鳥虫の外に、「人のためにひんなきいひすくし」をしてゐる部分が存在すると見るより外に仕方がない。「いひすくし」をしてゐるからこそ隠しておいたのであり、それを源経房が持帰つたのである。

尤も清少は悪口せんがために悪口したのではなく、「たゞ心ひとつにをのつから思ふ事をたはふれにかきつけた」ので、それが筆が迂つて「人のためにひんなきいひすくし」になつたのである。

ところが「人の心は変なもので、もし和歌や木草鳥虫について人の感心しさうなものばかり選んで書いたならば、なんだつまらないとそしられるであらう。反対に思ひのまゝにたはむれに書いたものだから、反つて、どうも面白い所があるとはめられた、人の心つて皮肉なものです」と清少が例の人心の裏を一寸のぞいてゐるのである。

「人にほめられた枕草子」とは、今跋をつけてゐる乙本ではなくて、既に世に流布してゐる甲本のことではなければならぬ。

これから考へて、乙本も甲本も、和歌や木草鳥虫の歌枕ばかりでなく、これに日記打聞的なものが連続した雑纂型であつたうと考へられるのである。

(6) 最後 日記打聞的部分が題詞の後に連続してゐたことの証拠を清少自身の詞によつて示し、雑纂型は清少自身の手になつたものであることを示さう。

あはれなるもの……………題詞
孝ある人の子……………項目
よき男の若きが御獄精進したる……………項目
たてへだてゐてうちおこなひたるぬか……………(中略)……………項目

右衛門の佐宣孝といひたる人
は「あぢきなきことなり……………」
……………(中略)……………

これはあはれなることにはあらねど
御獄のついでなり

「右衛門の佐」以下は項目「よき男の若きが御獄精進したる」に対する例の説明文で、御獄詣りの連想から宣孝の御獄詣りをもつてきたのである。

普通ならばこゝに来る事件は題詞になつた「あはれな」事件でなければならぬ。ところが宣孝の御獄参りは、質素な服装で参詣すべき処を、かやうな迷信的言説に従はず、美服で

参詣し、しかも罰にあたるどころか、反対に折よく筑前守の空いたのに任命されたといふ心臓のつよい、あくどい話である。故に末尾の「これはあはれなることにはあらねど御獄のついでなり」といふ附言がよく利いてゐるのである。

この附言の部は伝能因本も同じである。ところが、堺本では題詞、項目などと切離して、率然「右衛門の佐宣孝といひたる云々」の事談を載せその末尾に

「これをかきし事にもあらず、哀なる事にもあらず、めでたき事にもあねど、たゞそのころ耳にとまりし事をかきたるなり」(新校群書類説一六六頁)とあり、前田本でも堺本と同体裁の事談の後に

「これをかきし事にもあらず、めでたき事にもあねど、たゞそのかみ耳にとまりし事を書きたるなり」(前田家本枕冊子新註二五〇頁)とある。

この附言は「あはれなるもの」といふ題詞があつて、それにつゞく事談の附言として初めて意義をもつのである。堺本や前田本のやうな各種の事談の中に「右衛門の佐云々」の文が題詞なしに伍してゐるのでは「あはれなる事にはあらねど」の註釈は全然意味をなさないのである。

しかも雑纂本の附言「……御獄詣りのついでなり」の語気はどうしても著者自身でなければ言へない語気である。

かう考へると宣孝御獄参りの記事は、「あはれなるもの」の具体例として清少によつて最初から雑纂本のために作られたものであり、それを別人が雑纂系統本から分類本を改編して「宣孝御獄参り」の記事を日記打聞部へ分類するときこれはあはれ

なることにはあらねど云々」を当然削り去るべきものなのに、うっかり入れてしまひ、さて後でどうも文意がとゞのはないため、「あはれなる」だけ「を」をかきし事にも、哀なる事にも、めでたきことにも(堺本)、又は「を」をかきしことにもあらず、めでたきことにもあねど」(前田本)と改め、「御獄のついでなり」(雑纂本)を「たゞそのかみ耳にとまりし事をかきたるなり」と改めたのであらうと解釈されるのである。

(7) 三卷本二八九段「うちとくまじきもの」の如きも、前田本には「船の路。日のいとうららかなるに云々」の長文の部分が「正月一日はの巻」に題詞もなく出てゐる。そこでは文頭に「船の路」と出てゐる語が極めて不自然である。どうしても最初「うちとくまじきもの」の題下に「えせ者」と対立して「船の路」とあるのが自然であらうと思はれる。かやうな不自然なことは雑纂本から作者ならぬ別人が分類本を改編したからである。

これは雑纂本から作者ならぬ別人が分類本を改編したからであると思はれる。

かやうな見方から、清少納言の枕草紙は最初から雑纂型であり、分類型は別人の改編本であらうと推定するのである。

本論に使つた資料はありふれたものであるが、「翁丸」の段を中心として、その文意を幾分従来の解釈より深くさぐつて、清少の精神機構と表現形式の特徴をつかみ、その特徴を利用して、問題の多い枕草紙の原形・成立・諸本の関係を窺はうとした拙い試みである博雅の御叱正を仰ぐ次第である。(了)

附記 「人、人にもいはれて泣きなどす」の傍証

語文第四輯（九頁）拙稿において伝能因系の本文「人々にもいはれて泣きなどす」を筆者は「人、人にも云々」と解読して清少の原意を推定した。これと同一の思考法によるべき例を同じ枕草子の中から発見したから附記しておく。

つねふさの中將「頭弁はいみじうほめ給ふとはしりたりや。一日の文のついでに、ありし事など語り給ふ。「思ふ人々のほめらるゝはいみじくうれしく」などまめやかにの給ふもをかし。（岩波文庫版春曙抄二二一段、延宝版も同じ。傍線筆者）

春曙抄による諸家（金子・栗原・松平・永井・窪田氏等）は傍線部を何の疑問もなくそのまま採用されて、「自分の愛する人達の誉められるのは非常に嬉しくて溜らない（金子氏評釈）」と解かれる。しかしかうすると、「思ふ」主体は経房、対象は清少にならねばならぬはずの本文に於て、「愛する人達」といふやうに、「思ふ」対象を多数にせねばならぬのは少しをかしい。

とはいへ伝能因本来の形は「思ふ人々にほめらるゝは」とあったことが否めない。（武藤氏枕草紙考異、吉沢氏校註枕草子、旁註など参照）

しかし一方意味の方から云ふと伝能因本の形では通じないのである。古活字本に拠られる吉沢氏もこれには困られて、この所は三巻本を採られた。（校註枕草子下巻二二三頁）

（そして「思ふ人」は「思ひ人」であらうと推量せられたが、之は筆者に云はすれば誤推であって、「思ふ人」が正しい）

北村季吟も、伝能因本に拠りながら、通じない所は三巻本によるといふ法式に従って、こゝは「思ふ人々の……」と、三巻本と伝能因本の雑種を私意によって作上げたのだらう。

しかしこの雑種の本文も意味は通じにくい。ところが三巻本の本文自身はどうかといふと、「思ふ人の人にほめらるゝは……」とあり、これならまことに自然である。（関根氏集註・田中氏評解参照）

関根翁も

「思ふ人の人にほめらるゝ——是れも千蔭本（筆者註三巻本）に従ふ。思ふ人は清少をさすこと云ふに及ばず。文意いと明ならずや。諸本「思ふ人々にほめらるゝ」とありて「の」の一字を脱せしからに、註解もおぼつかなく成りたる也」（集註四〇二頁）とあり、お喜びの様子が偲ばれる。まことに達見である。たゞし「翁丸」の所でも述べた様に、筆者に云はすれば、も一つ奥がある。三巻本の使用者は、三巻本で意味が通じれば、伝能因本の本文をすぐ棄去るが、それは早い。こゝは伝能因本を「思ふ人、人にほめらるゝは……」と読むべきである。かうすれば三巻本の「思ふ人、人にほめらるゝは」と同意味の文になるのであり、これが後世「思ふ人々にほめらるゝ」と誤読せられるに至ったのである。こゝでも原著者が伝能因本文の誤読せられることを慮って、三巻本の様に推敲したのであらうと思はれる。伝能因本文に古い姿が残ったのである。これ全く前記「翁丸」の「人、人に」と同現象といへるであらう。

（昭和二七・四・七）

— 大阪大学助教授 —